

現役の土木業界の偉人たちの群像を描き 土木技術者に光を当てる『現代土木偉人の群像』



土木とは、社会基盤を通して社会を支える学問である。優しさで社会課題を見つけ出し、圧倒的な技術力でそれを解決に導く人を土木技術者という。

土木技術者の存在は「縁の下の力持ち」と喩えられる通り、広く一般に知られてはいない。業界外においてはよく知らないどころか、悪いイメージが先行している場面も散見される。談合や過剰な接待などの汚職事件がテレビなどで扱われ、「土木はよくわからないけど政治とつるんでお金儲けしている業界だ。」という実態と乖離したイメージが浸透している。また3Kに代表されるように、働き方の文脈でも悪い部分が注目されている。若者が志をもって目指すことができるような業界にならないことには、明るい未来は実現できないであろう。

しかし、本当は、現代の土木業界には、偉人と呼ぶにふさわしい人がたくさんいる。いかに災害から人の命を守るか、これ以上災害で人を死なせてたまるか、どのような構造物や都市を作ればより良い社会が実現できるか、と日々白熱した議論を展開している。このような土木技術者たちの思いや生き様、彼らがどんな志を持って、どんな壁に直面し、それをどのように乗り越えてきたかという記録は、時代を超えて、また国境を超えて、多くの人々を勇気づけるであろう。この意味で、現代土木偉人たちの生き様は、後世への最大遺物である。

このように、現代の土木業界には偉人と呼ぶにふさわしい人がたくさんいるにもかかわらず、将来、土木技術者となる我々土木学生でさえ、土木技術者の顔や名前はほとんど知らない。目標とするような土木技術者を挙挙できないのである。挙げる事が出来るとすれば、戦後の焼け野原や、明治時代の開拓地に社会基盤を建設した人々などである。つまり、会いに行けない故人である。こうなってしまった原因は、ひとえに情報不足である。いま生きて最前線で活躍する土木技術者の志や生き様にスポットライトを当てた一般向けの伝記は、皆無と言って良い。社会の産業構造の変化を踏まえると、いままさに、永久に歴史に埋もれようとしている。これは人類の損失である。

ここに、一石を投じる企画が『現代土木偉人の群像』である。一人の英雄を描くのではなく、多様な土木技術者の生き様を、群雄として生き活きと描く。そして、広く全国にこの本が普及したら、小・中・高校生が自分の人生や将来に思いを馳せるときに、この本を読んで、土木偉人たちの生き様を参考にできるような社会にする。技術者の地位向上が叫ばれて久しいが、この企画は数十年かけての世代交代によるパラダイムシフトで、世間の価値観を転換させることも目標とする。少年少女はもちろん、大人まで土木技術者として触発されて、読者の中から次世代の土木偉人たちが立ち現れてくれれば、これ以上の喜びはない。

土木技術者が自分で自分にスポットライトを当てることができないなら、学生の小さな手で懐中電灯を当てにいこう。そして、土木偉人たちの群像を私たちの手で活字にして、後世に遺す。それが現代土木偉人の群像である。